

6-4 現場でのひたむきな取り組みで社会的な信頼を回復

1. 立場と仕事

建設会社で主にトンネル工事の現場を歩き、既にいくつかの作業所長の経験を積んでいた。新しい現場は、市街地近郊の未固結砂層の下にトンネルを新設する技術的に難しい工事で、地上には住宅地があり地表面沈下対策が重視されていた。この現場に作業所長（現場代理人）として乗り込んだ。

2. 遭遇した事態

会社の経営難から与信低下が取り沙汰され、設計方法の疑問点や地質の差異を交渉しても発注者から「人材流出により技術力が低下しているのでは?」、「良い作業員が集まらないのでは?」と疑われ、交渉困難な状況が生まれた。

設計変更が必要となったのは次のような内容だった。

- ① 坑口に設計されていた計測器の設置は当初の設置方法では施工不可（追加費用の発生）
- ② 設計された地表面沈下対策のAGF-Rは未公開の技術（多額の追加費用が発生）
- ③ 中央導坑掘削中に切羽崩落が頻発（掘削中に新たな断層の存在が判明）
- ④ 地耐力が不足し（氷河期の露頭地質）、設計のAGFだけでは沈下対策が不足

また、資機材メーカーからの納品拒否もあり、JV運営の混乱が生じた。

発注者には何を訴えても聞いて貰えない状況が続き、まずは会社の信頼回復が先との状況に陥った。

3. 対応内容とその結果

状況を打開するには、施工者としてひたむきに、困難な技術課題を解決するための技術開発に取り組むことだと判断した。これにより現場スタッフのプライドを確保するとともに、発注者等の信頼を得ることが可能になるのではと考えた。少なくともコストダウンだけは聞いて貰えるのではないかと。

早速、技術課題の解決に取りかかった。直面する課題の解決には変形抑制が可能な先行支保技術が必要なことから、曲線ボーリングを利用した新たな技術の開発をVE提案した。施工技術検討委員会での承認・県議会での承認を経て正式に採用された。また、コスト面でも施工中に様々な工夫・改善を経て当初予算より安価に仕上げる事が出来た。

新技術の採用は協力業者への仕事増加という副次効果もあり有効であった。これまで施工困難とされていた曲線技術の大々的な採用・施工事例として業界からも大注目の現場となり、1年間で5000人を超える見学者が訪れた。この工法はその後地下鉄工事でも適用された。

この他に、職員、作業員、周辺住民、取引業者の不安払拭のため、現場事務所とプレゼン館を装飾しイメージアップを図った（事務所内に小川の流れ、金魚、学生の研修会場等）。

これらの取り組みによって、各方面からの信頼を得ることができ、工事も無事完成した。